

第6章 音注における並書表記

1. はじめに

『捷解新語』の朝鮮語による音注と対訳の並書表記^{*1}は、それぞれ各自並書と合用並書として対照的な表記法が用いられていることが指摘されている。朝鮮資料における並書表記については、辻星児(1975, p4)でも「当時の濃音表記は各自並書(kk, tt 等)は少なく、toin-si-’ os による合用並書(sk, st 等)の表記が一般であるのに、本書の音注においては、促音その他を示す場合の表記として、全て各自並書に統一されていることも注意される」と述べられている^{*2}。ハングル音注における並書表記は数多くあり、並書表記される用例の全てに統一した解釈を施すには無理があるようと思われる。本章では、以下の(ア)(イ)(ウ)の分類のうち、(ア), (イ)の例とは別に、並書表記の用い方が均質的ではないと思われる(ウ)を中心に検討・分析を行うことにする。

- | | |
|---|--------------|
| (ア) zo-u-mo- <u>ccu</u> (雜物) | ・・・舌内入声音の並書例 |
| (イ) mot-t <u>to</u> -mo(尤も) | ・・・促音の並書例 |
| (ウ) kin-cu-k <u>ka</u> -i(気遣い)、tyoin-k <u>ki</u> (天氣) ・・・(ア), (イ)例を除いた並書例 (下線は、並書表記を示す。以下同様) | |

(ウ)では、舌内入声音と促音の書記例を除外した並書表記^{*3}として、出現するすべての例が並書表記される例(例えば「ko-sso」)と、同じ語であっても刊本によって表記が異なる例など、同じ音節が同じ環境において並書・单書表記される例が少くない。そこで、並書表記がどういう語に用いられ、また、どういう環境で現れるのかについて総合的に分類・整理してみることにする。

2. 先行研究と問題提起

『捷解新語』における並書表記の分類については、森田(1973)と安田(1973)等により取り上げられている。森田(1973, p235)は、『捷解新語』原刊本における並書表記の分類を次のようにまとめている。

- (a) カ行・タ行の清音各音節、およびソ・ノの十二音節に限って現れる。
- (b) 語によって並書だけを用いたもの（助詞「こそ」のソなど）もないではないけれども、なお、助詞「から」のカに ka, kka があり、助動詞「た」に ta, tta があるように、同語が二様に記されたものもあって、全体的には必ずしも語に固定しているとは言えない。
- (c) 必ず語中・語尾に限って用いられ、語頭の例は全く存しない。
- (d) 前述のバ・ボの場合(バ行の濁音表記は、多くの例に p- が用いられるが、さいばん(裁判)、かんぱく(看品)の例のように並書の pp- が用いられる場合もある：筆者注)を除外すれば、明らかに濁音を写したと考えなければならぬような例は見出されない。
- (e) 先行の m・n・ŋ と応じて濁音を示す方法、即ち〔鼻音+清音〕の清音の位置に用いられたと見られるものは存しない。
- (f) 「もつとも」(九8オ)を mot-to-mo と記すような促音表記の、先行の t と応ずる位置、即ち、右(本論文では「上」：筆者注)の to の位置に用いられた例はほとんどない。右(本論文では「上」：筆者注)と同じ語を mot-tto-mo としたのは(五6ウ)、珍しい例外である。

安田(1973)は、原刊本との対比を通して、重刊本における重ね子音による表記(本章の並書表記)について、原刊本ではカ・タ行の清音各音節、ソ・ノの音節等の十二音節が並書表記されるのに対して、重刊本ではノが姿を消し、クワ・キヨ・シ・ス・セ・シャ・ショが新たに登場することによって十八音節が並書表記されることを指摘している。以上、両氏の並書表記に関する指摘の共通点をまとめてみると、カ

行、タ行などの語中・語末の音節を中心に並書が用いられていることと、並書表記が必ずしも語に固定していないことがわかる。また、両氏の調査により、原刊本から重刊本にかけての並書表記の異同を垣間見ることができる。しかし、両氏の調査では詳細に検討されていない語頭や濁音の並書表記の例については、本論文で原刊本を調査したところによると、語頭の並書表記1例と、濁音の並書表記4例が認められる。また、これらの語頭や濁音の並書表記の例は、原刊本だけではなく改修本・重刊本においても見られる。

1) 語頭の並書例^{*4}

したしたにもつかわしらるやうにこそさしられ(原八2ウ)

下々にも遣わしらる様にこそさしられ(「捷解新語釈文」(1973)、以下同様)

2) 濁音の並書例

すいもくせん加ほむしろ加わるうて(原一11ウ)

水木船が帆筵が悪うて

もんこん加ようて(原三12オ)

文言が好うて

とうもこうも申されん加(原四13オ)

如何も斯うも申されんが

われらなわなに加して御さる(原一17オ)

我等名は某で御座る

一方、並書表記の性格について、濱田(1955)、安田(1973)、Cho(1970)、荒木(1975)などは一種の清音表記、濃音表記、アクセント表記、強調表現であるとする。まず、安田(1973)では、濱田(1955)の説を受けて「日本語の、カ・タ行子音と、朝鮮語の k·t(c) で表わされる子音との間の音声的くい違いを調整するための、一種の清音表記」であるとされる。また、「濁音を修飾していた鼻音的要素の衰退とともに、その声門閉鎖的要素が薄れてゆくことを、姿を消したノに投影することが出

来るであろう」とし、「声門閉鎖的要素と鼻音的要素との音韻体系の均齊(symmetry)」を認めている。しかし、並書表記が用いられる理由について、「声門閉鎖的要素と鼻音的要素との音韻体系の均齊」であるという考え方には、以下のような疑問点が残る。

- *日本語のカ、サ、タ、パ行音により近く発音するための清音表記であるとすれば、なぜ並書表記が助詞、助動詞などの特定の語や音節を中心に用いられたのか。
- *声門閉鎖的要素と鼻音的要素との音韻体系が保たれたとすれば、原刊本以後、濁音や助詞「の」の並書表記の衰退とともに、カ、サ、タ、パ行音の並書表記も衰退していくはずであるが、そのような変化は見られず原刊本には見られなかった「クワ・キヨ・シ・ス・セ・シャ・ショ」の並書表記が重刊本において新たに出現するようになったのはなぜか。

なお、安田(1973)は、「声門閉鎖的要素は、アクセントの高い部分に保存され易く、次いで、重ね子音のあるものは、アクセントの表示という、違った機能に移行していったと想像を逞しくしたいのである」と述べ、アクセント史からの解明を示唆している。また、Cho(1970)においても kk, ss, tt, cc のように並書の音注が用いられる理由を「pitched or stressed」であるとし、アクセントによる解釈を試みている⁵。例えば、/toukka/([to'oka] ~ [to:k'a]), /mitsikkai/([mizjika'i])などのように、並書が現代日本語のアクセントに一致する例と近似する一部の例を示しており、近似しない例については『捷解新語』と現代日本語との時代的な差や方言的に大きな隔たりがあることを理由として、アクセント説を否定することはできないとする。ところが、並書表記がアクセントによるものとして推定するには以下のようないくつかの問題点が残る。

*並書とアクセントの不一致・・・時代性、方処性を考慮して『補忘記(貞享版)』に基づいてアクセントを調査した結果、『捷解新語』の並書用例の語が

そもそも『補忘記』に掲出されているケースが少いことと、並書用例が掲出されたとしても、並書表記とアクセントが必ずしも一致していない⁶。特に、「こそ」の例は「上平」⁷アクセントであるものの、kko-so が用いられる例は見られないのに対して、すべての例(原刊113例、改修19例、重刊8例)に ko-sso が用いられており、並書とアクセントとが一致していないことがわかる。

*並書表記の特定の音節や環境への偏り・・・並書表記はカ・サ・タ行子音や「の」(nno)などの音節を中心に用いられるのに対して、マ・ハ・ラ行子音や母音音節などには並書表記が用いられていない。また、並書表記は語中・語末の無声子音を中心に用いられており、濁音や母音音節、語頭音などにはその数が限られていることから、並書表記が日本語のアクセントを示したと考えるにはあまりにも並書表記の偏りがあり、並書表記をただちにアクセントの表記として考えるには矛盾が多い。

荒木(1975)は、並書表記される例を品詞別に分け、「名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞」における多音節語中の並書の場合は当時の日本語が濃音に近い音を持っていたとし、「助動詞・助詞」の場合は「とりたてて述べようとする意」、即ち「強調」の意味を持っていると推定している。しかし、荒木(1975)が、並書表記の例を品詞別に分けて「濃音」または「強調」であるとしたことや、同じ品詞、同じ語であっても表記が一致していない点などによって、ただちに並書表記が「当時の日本語が濃音に近い音」であるとか「強調表現」であると位置付けることには疑問が残る。

趙爗熙(2001)は、ハングル音注に用いられる並書表記が統一された基準によって表記されず、同じ巻の同一語でも並書表記と単書表記とが共存することについて、これまでの先行研究では「日本語から見た観点を述べているが、各資料における総合的な分析と通時的な研究、また、その両表記の現れる背景について明らかにしていない」ことを指摘している。同氏は、並書表記が用いられる環境とその機能について、以下のようにあげている。

そもそも『補忘記』に掲出されているケースが少いことと、並書用例が掲出されたとしても、並書表記とアクセントが必ずしも一致していない^{*6}。特に、「こそ」の例は「上平」^{*7}アクセントであるものの、kko-so が用いられる例は見られないのに対して、すべての例(原刊113例、改修19例、重刊8例)に ko-sso が用いられており、並書とアクセントとが一致していないことがわかる。

*並書表記の特定の音節や環境への偏り・・・並書表記はカ・サ・タ行子音や「の」(nno)などの音節を中心に用いられるのに対して、マ・ハ・ラ行子音や母音音節などには並書表記が用いられていない。また、並書表記は語中・語末の無声子音を中心に用いられており、濁音や母音音節、語頭音などにはその数が限られていることから、並書表記が日本語のアクセントを示したと考えるにはあまりにも並書表記の偏りがあり、並書表記をただちにアクセントの表記として考えるには矛盾が多い。

荒木(1975)は、並書表記される例を品詞別に分け、「名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞」における多音節語中の並書の場合は当時の日本語が濃音に近い音を持っていたとし、「助動詞・助詞」の場合は「とりたてて述べようとする意」、即ち「強調」の意味を持っていると推定している。しかし、荒木(1975)が、並書表記の例を品詞別に分けて「濃音」または「強調」であるとしたことや、同じ品詞、同じ語であっても表記が一致していない点などによって、ただちに並書表記が「当時の日本語が濃音に近い音」であるとか「強調表現」であると位置付けることには疑問が残る。

趙燭熙(2001)は、ハングル音注に用いられる並書表記が統一された基準によって表記されず、同じ巻の同一語でも並書表記と单書表記とが共存することについて、これまでの先行研究では「日本語から見た観点を述べているが、各資料における総合的な分析と通時的な研究、また、その両表記の現れる背景について明らかにしていない」ことを指摘している。同氏は、並書表記が用いられる環境とその機能について、以下のようにあげている。

- (1) 濃音表記が現れる者は、韓国固有語に現れるのと同じく語中・語末で現れ、表記の統一性はないが、特定語・特定音節に限られている。
- (2) 全体的な傾向としては、『捷解新語』は「原刊本」から「改修本」へは平音表記がふえているが、「重刊本」では濃音表記が現れる語は濃音表記に改修され、表記が統一される傾向がある。
- (3) 清音に用いられる濃音表記は、環境より語に限られていること、語中より語末・文末に多く現れること、また、平音表記と濃音表記の文を対照してみた結果などから、有声音化を避ける機能もあるが、ほとんどが日本語の音声に忠実な表記であることが分かる。
- (4) 音注表記の順は日本語を聞こえたとおりに付け、また、付けた音注を読んで、韓国語の干渉で相応しくないところには多様な工夫が行われている。
- (5) 濃音が表記されている語の音声的要素は、韓国語濃音の特徴と同じく空気が口腔内で著しく圧縮され発する、即ち、tense であることを表している。なお、tense 的音はより明瞭に、大きな空気圧を持って発音されることから、ピッチ、強調の音声的要素が反映されていると思われる。ただ、『捷解新語』の「nno」は韓国語の音価から [n:] (「nn」の音価を示すものと思われる：筆者注) を表したものと推測される。

本章では、以上の先行研究を踏まえた上で、原刊本に見られる舌内入声音、促音の書記例を除いた並書表記、及び単書表記を中心に調査・考察を行い、並書表記の用い方について明らかにすることとする。以下では、それぞれの並書表記・単書表記について詳しく検討する。

3. 舌内入声音、促音を除いた並書・単書表記

『捷解新語』における並書の用例数は、原刊本970例、改修本1444例、重刊本1300例で、原刊本にくらべて、改修・重刊本においては並書表記が増えていることがわかる。このように並書表記の増加する理由は、原刊本に出現した「こそ」「の」

の並書用例が改修・重刊本において激減したり、消滅する一方で、クワ・キヨ・シ・ス・セ・シャ・ショなどの並書音節が改訂版に新たに登場するからである。また、「てんき (ttypoin-kki)」のように、原刊本では見られなかった語頭の並書例が重刊本において見られるほか、原刊本の「まるする (ma-ru-su-ru)」が改修・重刊本において「まする (ma-ssu-ru)・ませう (ma-ssyo-u)」などとなり、500余りの並書が追加されたためである。

その他、濁音の並書表記は、原刊本では4例だったのに対して、改修本22例、重刊本8例が見られる。一方、原刊本に用いられる並書の用例は多くの場合において単書表記されており、並書・単書表記の全体の用例数を比べてみると、並書970例に対して単書が819例見られる。

以下、並書表記される音節(子音)の種類別に検討を加える。検討する順序は、並書表記が多く見られる音節(子音)の順序(カ行、タ行、サ行、ナ行)に従う。

3.1. 「カ行」

原刊本におけるカ行の場合には、清音各音節に並書が用いられる。カ行の音節における並書例を見ると、常に並書表記されるのではなく、以下に挙げる例のように並書と単書の両表記が用いられる。その比率は並書242例；単書61例で、語によって並書の用例数が多い場合と単書の用例数が多い場合がある。「か」の並書表記は～か(係助詞)、日数(ふつか(二日)、とうか(十日)等)、濁音を表す「か」(格助詞)の他に、／～かと、～かな、～から／おろかに、こまかに、しつかに、たしかに、にわかに／きつい、みちかい／ふさんかい／はつかし、むつかし」など、多種多様の語に用いられる。また、「き」では「てんき」、「く」では「かたく、ことく、とかく、ふそく、まんそく、わたくし」、「け」では「かたしけなう、ふなけ」、「こ」では「おとこ、みやこ」などの例が並書表記されている。以上のほとんどの例に並書表記が用いられるのに対して、「～かと、～かな、～から、ふさんかい⁴⁸、てんき」などの例に並書・単書両表記が用いられる。特に、「～かと、～かな、～から」などの例は並書表記より単書表記の例が多く見られる。

原刊本におけるカ行の例を全体的に見てみると、すべて並書表記が用いられる例

に、「～か(係助詞)75例、～か(日数)12例、ことく14例、わたくし13例」などがあり、大半が並書表記される例に「かたしけな(う)」(並書21例：単書2例)がある。

なお、形態面において語尾が「～かに」「～かい」「～かし」などのように同形となる形容詞・形容動詞語尾の例に並書表記される場合が多々見られる。

3.2. 「タ行」

カ行と同じく、タ行の場合にも清音各音節に並書が用いられており、原刊本のタ行に見られる並書・単書表記は505例：405例である。そのうち、「た」はすべてが助動詞の例だけで、「申た」と「～(ら)れた」の並書・単書表記の用例数はそれぞれ7例：6例と8例：21例で両表記に明確な使い分けが現われていない。しかし、「た」の並書例の6割弱を占めている「まるした」(57例)の場合には、すべての例が並書表記されており、「ち」の並書例である「あち、こち、そち」等の48例も、そのすべてが並書表記されており⁹、語によって並書・単書表記の使い分けが異なるようである。また、「つ」では、「おとつい、ひとつ、ふたつ」など多くの例が並書表記されるが、「いつ」の例だけは1例：6例で単書表記の例が多い。ただし、「いつ」例の場合は、後続語によって並書と単書が使い分けられているようである。例えば、「いつにても(i-ccu-ni-tyoi-mo)」(1例)は並書表記されるのに対して、「いつころ(i-euy-ko-ro)」(6例)は単書表記しか用いられない。「て」では、並書と単書の例がそれぞれ96例と292例で、並書に対する単書の数は3倍程度である。「と」では、並書用例と単書用例の数は242例：16例で、引用・並列助詞「と」や「ゆるりと、わざと、なんと」などの例がほとんど並書表記される。

それに対して、単書だけが用いられる例は、引用・並列助詞「と」7例、「～などと(-nan-to-to)」2例、「～かしと(-ka-si-to)」「～かなと(-ka-na-to)」「～ならはと(-na-ra-pa-to)」「こんと(来んと、kon-to)」「候やと(soro-ya-to)」)、助詞「とも」6例、「なにとそ」3例である。

原刊本におけるタ行の表記例を全体的に見てみると、常に並書表記される例には「あち、こち、そち／ひとつ、ふたつ／するすると、なんと、ゆるゆると、ゆるりと、わざと」などの例がある。それに対して、「～た」は並書97例：単書85例、「～

と」は185例：7例、「～て」は96例：292例で、並書も単書も用いられる場合があり、語によって並書と単書の用い方が異なるようである。

3.3. 「サ行」

サ行では、「そ」だけが並書表記される。原刊本の「そ」の並書表記は、「さいそく」と「こそ」の2種で、「さいそく」の場合には並書と単書がそれぞれ1例：2例用いられるのに対し、「こそ」の場合には113例すべての例に並書表記 *ko-sso* が用いられている（改修本では19例、重刊本では8例）。このように、「こそ」のすべての例が日本語の上平アクセントとは異なる *ko-sso* が用いられたのは、「こそ」の「そ」を並書表記としなければならないアクセントとは異なる何らかの理由があったようと思われる。そこで、「こそ」が朝鮮語対訳において強調の意味をあらわす「や」としても用いられている場合があることと関連づけて考えてみると、強調の意味を意識したあまり「こそ」の「そ」が強められた結果、並書表記されたのではないかと考えられる。

例えば、「こそ」の朝鮮語対訳を調べてみると、原刊本は113例のうち強調の意味を持つ「や、自此社（卷十）」が11例見られ、改修本では19例のうち9例が、重刊本では8例のうち4例がそれぞれ強調の意味を持つ「や、自此社（卷十）」が用いられていることがわかる。

ただし、ここで一つ疑問点として残るのは、「こそ」のアクセントが「上平」であるのに対して、高いところの「こ」に並書表記される例が一例も見られないということである。しかし、朝鮮語を母語とする編者が有氣音と無氣音の音韻論的区別をしていることと並書表記が一般的に語中・語末の環境で用いられていることを考えてみると、「こそ」の場合において「こ」ではなく「そ」が並書表記されるのが自然のように思われる。即ち、現代日本語のカ行音は語頭では有氣音的であるといわれているが、同じように『捷解新語』の「こそ」の場合にも日本語の現実音を忠実に反映しようとした結果、日本語のアクセントとは異なった捉え方によって並書表記されたものと考えられる。

3.4. 「ナ行」

ナ行の場合には、助詞の「の」だけに並書表記が用いられる。原刊本における「の」の並書表記と単書表記との割合は98例：346例で、並書用例よりも単書用例のほうが3倍以上多い。並書が用いられる用例には「かい(甲斐)の～、あすの～、おもいのほか、ことのほか」など、固有名詞を受ける場合や慣用的表現が多く、単書が用いられる用例には「こなたの、そなたの」のような代名詞を受ける場合が多いが、並書と単書が明確な意識のもとに使い分けられたかどうかは疑問である^{*10}。また、助詞「の」の並書表記は、原刊本では98例だったのに対して、改修本では4例に激減し、重刊本では全く用いられなくなるが、この理由についても未だに明らかにされていない。

森田(1973)においても「nn は助詞「の」に限るが、これがどんな意図で記されたのか明らかでない」とし、安田(1980)においても「同じ発言者の内部で、ノが二様に出ることは、要するにノを二様に聞きなし表記し分けたわけであろう」とされ、「の」表記が何を基準にして並書・単書として使い分けられたのかは言及されていない。

そこで、「の」だけが並書表記される理由について、並書表記が現れる環境と関連づけて考えてみることにする。辻(1991)は、重刊本に見られる区切り小点について「『捷解新語』は、外国人—朝鮮人—のための日本語教科書であり、この区切りは、学習に便ならしむために付けられたものであることは確かである」と述べているが、並書表記の場合も、朝鮮語母語話者のための日本語教科書として、日本語の発音に近い音として実現しようとした試みであると推測することができる。「の」の場合にも文節末の環境で並書表記されており、日本語の学習の便宜を図ったものと思われる^{*11}。

但し、「の」の並書が日本語学習に役立てるための表記であるとすれば、原刊本だけではなく重刊本においても積極的に並書表記を用いてもよいはずであるが、改修本・重刊本にかけて「の」並書例の姿が完全になくなるのは何故かという疑問が残る。

この問題については、朝鮮語^ン(nn)の消滅と深い関係があるようと思われる。朝

鮮語の並書 nn は、朝鮮中期から近世初に限って現れ、近世初期以後(nn)が消滅したため、音注「の」の並書表記も用いられなくなったのではないかと思われる。このことは、カ・サ・タ行音の並書表記が原刊本と同様改訂版においても用いられているのに対して、助詞「の」の並書だけが nn の消失と同時期に急激に減少し、ついに重刊本以後には nn が一切用いられなくなるということからも裏付けられるのではないかと思われる。

一方、丘(1995)は、各自並書について、**ㄱ**(kk), **ㅋ**(tt), **ㅍ**(pp), **ㅌ**(cc), **ㅅ**(ss)は、特殊な環境による音韻変化の allophone として‘音韻単位ではない硬音’であり、**ㄴ**(nn)は「長音符号」である^{*12}とし、並書 nno が音声表記であることを間接的に示唆している。

3.5. 本節のまとめ

以上のように、原刊本におけるカ行・タ行の清音各音節には並書表記が見られるものの、サ行・ナ行の場合には「そ」「の」の音節にしか並書表記が現れない。このような事実からサ行・ナ行の「そ」「の」に用いられる並書表記は、カ行・タ行の並書表記の性格とは異なるものとして考えなければならない。即ち、カ行・タ行の清音各音節が無声破裂音か無声破擦音であるのに対して、サ行の「そ」の場合は「さいそく」の1例を除いてすべてが係助詞「こそ」の例で、ナ行の場合は助詞「の」だけが並書表記として現れており、カ行・タ行とサ行・ナ行の並書表記は異質的であるように思われる。ただし、並書表記の多くの例が語中・語末に現れるという点においては各行の別とは関係なく共通している。このように並書が用いられる位置や環境などについては、さらに4節で取り上げることにする。

一方、助詞「の」や濁音の並書例を除いては、無声子音が並書表記される場合がほとんどであることが指摘できる。特に、係助詞「か」、助動詞「た」、係助詞「こそ」、日数を表す「か」等のように並書表記だけの場合と、助詞「て、の、とも、～かと、～かな、～から」等のように並書表記も單書表記も用いられる場合がある。これらの例に対して「こと、さて、さため、はじめ、たてまつり、ところ、ひとり」等の例のように語中・語末に無声の音節を持っていながら單書表記されるだ

けの例も少なくない。このように、並書表記、または単書表記される例は多種多様の語に至っているが、それぞれの語の環境や性格、語別、形態類型別に多様な基準で並書・単書表記を使い分けていることが認められる(《資料》参照)。

4. 「有氣音」「濁音」の並書表記

原刊本における「舌内入声音、促音の書記例を除いた並書」用例のうち、前節で取り上げなかった「有氣音」「濁音」の並書表記などを中心に考察を行う。これらの例は、和語・漢語の並書表記の一部に過ぎないが、並書表記の全体像を解明するにあたって欠かすことのできない例である。

4.1. 「有氣音」

原刊本における「こそ」「の」等の並書の用例数が改修の過程で極端に減っていく中で、それとは逆に韓国漢字音において有氣音である「てんき」(天気),「さいそく」(催促)などの例は並書表記される用例数が増えていく。例えば、「てんき」の例を調べてみると、原刊本では「き」だけが並書される場合があったのに対して、改修本では語頭の有氣音「て」にも並書表記が現れ、重刊本では、すべての例が語末の「き」はもちろん語頭の「て」にも並書表記が用いられる。

<表1>「てんき(天気)」の例

| 用例 | 原刊本 | 改修本 | 重刊本 |
|-------------|-----|-----|-----|
| tyo(i)n-ki | 10 | 1 | |
| tyo(i)n-kki | 7 | 2 | |
| ttyɔin-ki | | 6 | |
| ttyɔin-kki | | | 11 |

また、「さいそく」の「そ」は、原刊本では3例のうち1例だけが並書表記されていたのに対して、改修本・重刊本では4例すべてが並書表記される。

<表2>「さいそく(催促)」の例

| 用例 | 原刊本 | 改修本 | 重刊本 |
|---------------|-----|-----|-----|
| sa-’ i-so-ku | 2 | | |
| sa-’ i-sso-ku | 1 | 4 | 4 |

朝鮮語では、環境によって語中の無聲音が有聲音として現れる(朝鮮語は、音韻論的に有聲音と無聲音との対立がない)のに対して、有氣音の場合は語頭でも語中でも有聲音化されない。そこで、韓国漢字音において有氣音である「天」「促」などの影響により日本語の発音においても呼気が強く出るのをさけつつ、その一方、語頭や語中でも有聲音化しないことを強調するために、ハングル音注において並書表記が用いられるようになったのではないかと考えられる。

なお、「かんほく(看品)」の例も原刊本の9例すべてが kam-ppo-ku のように並書表記されており、有氣音の場合多くの例が朝鮮語の影響(母語の干渉)を避けようとして並書表記されたものとして考えられる。その他、「批判」の2例には pi-pphan(原四20ウ)と phi-phpan(原五28オ)が、「裁判」の1例には sa-i-phpan(原八32オ)が用いられ、「判」の音注に韓国漢字音の有氣音 ph が含まれる pphan、phpan のような例が見られるものの、両方ともに並書表記を用いる点において共通している。「天」「促」などの例についても「判」の例と同じように韓国漢字音の有氣音であることを意識し、日本語の発音においては呼気が強く出るのをさけつつ、有聲音化されないように並書表記を用いたのではないかと思う。

4.2. 「濁音」

原刊本ハングル音注における濁音の表記法は清音または半濁音で示し、その直前の綴り字の末尾に m・n・ŋ のどれかを加えるか(第一方法)、m・n・ŋ を一つの綴り字の中に取り込み、mp・nt・ŋk のように示す(第二方法)のが一般的である^{*13}(「第一方法」「第二方法」の用語は、森田(1973)による)。

(a) 第一方法：濁音たるべき音節は清音または半濁音の綴字で示し、その直

前の綴字の末尾に $m \cdot n \cdot \eta$ のどれかを加えて示すものであって、語中・語尾の濁音表記に用いられる方法。

および ' o -' yom - pi(及、-18オ)

ゆだん ' yun - tan(油断、-9オ)

かず kan - su(数、-9ウ)

なにがし na - niŋ - ka - si(某、-1オ)

(b) 第二方法：第一の方法の応用である。即ち、第一の方法では、語頭の濁音を表記することができない。 $m \cdot n \cdot \eta$ を先行させて添えるべき、前の綴字がないからである。そこで、 $m \cdot n \cdot \eta$ を一綴字に取り込んでしまう方法。

どこ nto - ko(-15ウ)

御ざる ŋko - za - ru(-3オ)

ばん mpan(晚、六4ウ)

しかし、これらの例とは別に、原刊本から重刊本にかけて濁音が並書表記される例が見られる。以下に、そのすべての例を取り挙げる。

*原刊本(4例)・・・2節の「2)濁音の並書例」再掲

すいもくせん加ほむしろ加わるうて(-11ウ)

水木船が帆筵が悪うて(「捷解新語釈文」(1973)、以下同様)

われらなわなに加して御さる(-17オ)

我等名は某で御座る

もんこん加ようて(三12オ)

文言が好うて

とうもこうも申されん加(四13オ)

如何も斯うも申されんが

*改修本(23例)

おとといここもとゑくた里まして(一1ウ)

一昨日爰元え下りまして

御こころおそゑられくたされませい(一6オ)

御心を被添ら被下ませひ

へちに申てくたされう加とそんして申まする(一38オ)

別に申して下されうかと申しまする

とうらい加このあいたわ御ひやうきて御さつた加(一39ウ)

東薬が此の間は御病氣で御座ったが

そさしゆゑさしつ加ゑのないたんお申あけて(一43ウ)

送使衆え差し支えのない段を申上で

されいわさんしのまで御さるほどに(一44ウ)

茶禮は暫時の間で御座る

きやくしん加きてこそ(一48ウ)

客人が来てこそ

せいたして申あけてみませうけれども(一49ウ)

精出して申上で見ませうけれども

もんこん加ようて(三16オ)

文言が好うて

このくにのしんかになりましたほどによろつのことお(三20オ)

此国の臣下に成りました程に萬のことを

まゑよ里は加里のつよいよわいのいてい里に(四2オ)

前より秤の強い弱いの出で入りに

きみよう御さはきくたされませい(四4オ)

気味好御捌き被下ませひ

おののにも御そんして御さ里ませう(四17ウ)

各にも御存で御座りませう

御つ加いわなに加して御さ里まする(五2オ)

御使は何某で御座りまする

御たいきな御わた里て御さ里まする(五8ウ)

御大儀な御渡りで御座りまする

い加うやすいことて御されとも(五32ウ)

いかう易い事で御座れども

せんこのおもむきおねんころにさんしまて申たれば(五41ウ)

先後の趣を懇ろに三使まで申したれば

おおせられまするたう里もつともてわ御さ里ますれとも(六25オ)

仰せられまする通り尤もでは御座りますれども

ゑとの御らうちうよ里おくられましたきんすお(八27オ)

江戸の奉行より送られました金子を

さやうにおおせられまして加たしけなう御されとも(九3オ)

左様に仰せられまして忝御座れども

これ加ひとつのかすとわおもゑとも(九14ウ)

是が一つの疵とは思えども

いま加もはやしうねんあま里にもな里ますれとも(九28ウ)

今が最早十年餘りにも成りますれども

されともはらもたてられず(九29ウ)

然れども腹も立てられず

* 重刊本(9例)

さきに。いれて。くたされ。ませい(一29ウ)

先に入れて被下ませひ

御。いて。さつしやるる。やうにして。みさつしやれい(二6ウ)

御出さつしやる、様にして見さつしやれひ

もんこんかようて(三15ウ)

文言が能うて

この。くにの。しんかに。なり。ましたほとに。よろつの。ことお(三19オ)

此国の臣下に成りました程に萬のことを

おのおのにも。御そんして。御さりませう(四16ウ)

各にも御存で御座りませう

御。つかいわ。なにかして。御さり。まする(五2オ)

御使は何某で御座りまする

いち。にちても。御。くつろけ。なされて(五17ウ)

一日でも御寢被成て

おとり。まする。やうすお。みますれば(六10ウ)

躍まする様子を見ますれば

つしまゑ。つきました。とうせんに。よろこひ。まする。ところに(八14ウ)

対馬え着きました同然に歓びまする處に

前節でも述べたように、先行研究においては濁音の並書表記についての指摘がほとんどないと思われる。しかし、濁音に並書が用いられる例は、並書全体数から見ると少数ではあるが、濁音の一般的な表記法とは相違する点において注意されるところである。濁音の並書用例は、原刊本4例、改修本23例、重刊本9例で、計36例のうち、語頭の並書表記例は改修本と重刊本にそれぞれ1例ずつ見られる。また、音節別に用例の分布を調べてみると、ガ行(か)6例とダ行(た, つ, て, と)30例が見られる。このように、主にカ行・タ行の濁音に並書が見られており、特に、タ行の濁音に並書が集中して見られることが明らかであるが、いったいその理由はなにゆえであろうか。

まず、その理由として考えられるのは、影印本のハングル表記からも分かるように、ガ行のㄱ(kk)とㆁ(ŋk)の表記は区別しやすいのに対して、ダ行のㄸ(tt)とㄴㄷ(nt)の表記は区別が付かない場合があることである。即ち、濁音を表すのに、ハングル表記ㆁであるべきところにㄱを用い、ㄴㄷであるべきところにㄸを用いるとい

った誤植の可能性も考えられる。しかし、音注を写した編者が朝鮮語を母語とする朝鮮人であることや原刊本のㅇㅋ(ŋk)、ㄴㄷ(nt)が濁音の並書表記として用いられる例が一例も見当たらないことなどから考えると、ㅇㅋをㅋに間違えたり、ㄴㄷをㄷに間違えるような単なる表記の問題ではなさそうである。また、濁音に並書表記が用いられる環境や語別から見ても、ただの表記の誤りのようには考えられない。

一方、小倉(1928)は朝鮮語の硬音について「濁音なり」「清音と濁音との中間音である」「有聲音的性質を帶びて居る」とする。このような観点から考えてみると、日本語の濁音をハングル音注において並書表記(硬音)として表したとしても不思議ではない。

本節で取り上げる濁音の例は、用例数は少ないが並書表記36例のうち「くたさる」「~て御さる」「~とも」のように、繰り返して同じ語に並書表記が用いられることから考えてみると、これらの例はただの誤植の問題ではなさそうである。特に、濁音「か」のすべての例(原刊本3例、改修本2例、重刊本1例)が撥音「ん」に後続する環境に用いられるのは、ゆっくりと丁寧に発音された撥音に後続する濁音を、有氣音と無氣音の対立を持つ朝鮮語を母語とする編者が無氣音として捉えた結果、並書表記を用いるようになったのではないかと思う^{*14}。

その他、並書表記は一般的に語頭に用いられないが、「たん」(段)、「とうせん」(同前・同然)^{*15}、「たいくん」(大君)等の例は語頭において並書が用いられている。これらの例は漢字音の全濁音である点で共通しており、正音表記における全濁音を各自並書として用いた^{*16}ことと一致している。このように考えてくると、全濁音の並書表記はただの誤謬というより、知識層が持っていた漢字音の知識の影響によるものであるという考え方も排除しきれないのではないかとも思われる。

以上の例からも分かるように、濁音のハングル表記は、環境や語の性格によって m・n・ŋ のような鼻音を伴う表記(有聲音)の他に、並書表記(硬音)が用いられたことになるが、有聲音と硬音との関わりについてはさらに緻密な検討を行わなければならないと思う^{*17}。

5. 並書表記が用いられる環境

前節までの調査から、語中・語末の音節を中心に並書が用いられていることと、並書表記が語に固定しておらず場合によって並書表記も単書表記も用いられることが明らかになった。そこで、本節では同じ刊本の同じ語がどのような場合に並書表記されるのかについて、それが用いられる環境を中心にいくつか例を挙げて検討してみる。

5.1. 語中・語末の並書表記

並書表記が用いられる位置としてその優先条件は、「①語末・文節末の無声子音、②語中の無声子音：後続の音が無声子音でない場合、③語中の無声子音：後続の音が無声子音である場合」の順であることが指摘できる。

5.1.1. 「～かと」、「～たと」

原刊本における「～か(係助詞)」と「～かと」のハングル表記例を調べてみると、「～か(係助詞)」の場合は、すべての例が並書表記されるのに対して、「～かと」の場合の「か」は、並書用例より単書用例のほうが多いことがわかる。また、-ka-tto のように「と」だけが並書表記されるか、-kka-tto のように「か」と「と」とともに並書が用いられるのに対して、-kka-to のように「か」だけに並書が用いられ、「と」に単書が用いられる例は一切存在しない。

・助詞「か」+助詞「と」

-kka-tto(14例)：けうわみまるせう加とおもいまるする(原二17ウ)

今日は見まるせうかと思いまるする

(「捷解新語釈文」(1973)、以下同様)

-ka-tto(20例)：やまい加なおおもる加とおもいまるする(原二5オ)

病いが猶重るかと思いまるする

-kka-to(該当例ナシ)

同じように、原刊本における「～たと」のハングル表記例をみると、助動詞+助詞の-tta-tto が3例(すべてが促音例、-na-tta-tto-、-ŋko-za-tta-tto-、-ma-i-tta-tto-)、助動詞+助詞の-ta-tto が8例見られるが、助動詞+助詞の-tta-to のような例は見られない。

・助動詞「た」+助詞「と」

- tta-tto(3例)：あまりはや御きたとそんしまるしたに(原五4ウ)
餘り早(う)御座ったと存じまるしたに
- ta-tto (8例)：さてわちうしんおねんころにさしられたとおしらるほとに
さては注進を懇ろにさしられたと仰しらる程に (原五7ウ)
- tta-to(該当例ナシ)

以上の「か」や「た」に無声子音「と」が後続する「～かと」「～たと」の例からもわかるように、「か」や「た」が語末で現れる場合は多くの例が並書表記されるのに対して、同様の例が語中に現れる場合には単書表記のほうが優勢である。さらに、「～かと」「～たと」の例で、「と」が単書表記されて「か」や「た」が並書表記される例が一切見られることからも、それぞれの音節が現れる環境と表記とは密接な関係にあることが確認できる。

5.1.2. 「～てこそ」

原刊本における接続助詞「て」の並書表記と単書表記との割合を係助詞「か」や助動詞「た」、その他の例とくらべてみると、並書表記に対する単書表記の数が一段と多いことがわかる。そこで、接続助詞「て」に「こそ」が後続する「～てこそ」の例を調べてみると、並書表記の-ttyoi(ŋ)-ko-ssو は4例見られるのに対して、単書表記の-tyoi(ŋ)-ko-ssو は45例が見られる。

このように、係助詞「か」や助動詞「た」等の例と接続助詞「て」の例において並書表記と単書表記の割合に大差が見られるのは、係助詞「か」や助動詞「た」などの例が文節末に現れやすいことと、接続助詞「て」の例が文節中に現れやすいこ

ととに関係しているようである。また、並書表記が一つの語句内に2ヶ所に分かれて用いられる例がほとんど見られないことから考えると、「～てこそ」の場合は「こそ」の「そ」が必ず並書表記されるのに対して、「て」のほとんどの例は单書表記されるのが一般的であるといえる。一方、原刊本における「て」の並書表記が96例見られるのに対して、改修本、重刊本においてはそれぞれ210例、208例であり、原刊本の改修の過程で「こそ」の用例数が減少していくことと「て」の並書表記が増加していくこととは関わりがあるようだ。即ち、「こそ」の数が減少していくことによって、「て」の例が文節末の環境に現れやすくなつたことが改修本・重刊本において「て」の並書表記が増加する一因になったと思われる。

5.2. 先行母音と並書表記

荒木(1975)は、原刊本における並書音節の先行母音として「イ・ウ」音節が多く用いられることを指摘しているものの、結局並書が何の目的で使用されたのかについては不明であるとする。しかし、本節で並書表記と先行母音との関わりについて検討してみた結果、カ行の場合は先行母音 u が多く、タ行(た, て, と)の場合は先行母音 i が多いことがわかる。

<表3>先行母音と並書・单書表記

| 並書・单書 先行母音 | k系 | | t系(た, て, と) | | c系(ち, つ) | | s系 | | n系 | |
|---------------|-----|-----|-------------|-----|----------|-----|-----|-----|-----|-----|
| | -kk | -k | -tt | -t | -cc | -c | -ss | -s | -nn | -n |
| i- | 39 | 423 | 262 | 282 | 22 | 192 | 1 | 382 | 39 | 603 |
| yo(i)- | 8 | 184 | 43 | 290 | 23 | 34 | 0 | 178 | 10 | 218 |
| a- | 44 | 534 | 145 | 337 | 8 | 132 | 2 | 741 | 20 | 350 |
| o- | 24 | 706 | 29 | 424 | 67 | 156 | 113 | 459 | 13 | 834 |
| u- | 103 | 368 | 66 | 161 | 4 | 67 | 0 | 777 | 16 | 617 |

上の<表3>の数字は原刊本における先行母音に対する並書と单書の用例数で、全体の数を見ると並書の数を单書の数がはるかに上まわる。k系は先行母音 u、t系は先行母音 i のほうが他の先行母音と比べて比較的並書例は多く現れる。特に、k

系と t 系の並書の数が他の系より多いことは明らかである。

そこで、k 系と t 系の共通点を考えてみると、両者共に並書の音節が無声破裂音で先行母音が狭い母音 u, i である場合に並書表記が多く見られることがわかる。このようなことから並書が発音上の問題と密接な関連性があるものとして推測できるのではないかと思う。即ち、u-k, i-t のように、それぞれの先行する狭い母音 u(奥舌母音), i(前舌母音)に続く無声破裂音 k(軟口蓋音), t(歯茎音)を、朝鮮語を母語とする編者が聞き、发声器官を緊張させてから息を詰めて出す朝鮮語の硬音としてとらえた結果、u-kk, i-tt のような並書表記を用いたのであろう。

また、n 系においても先行母音 i に後続する n の並書例 i-nn が他の先行母音に後続する例に比べていくらか多く見られる。特に、n 系の並書は原刊本で98例あったのが改修本においては4例に激減するが、その4例のうち先行母音 i が3例、先行母音 yo:i が1例で、いずれも n 系の調音点に近い狭い母音だけが残存しており、先行母音と並書との関係を裏付けてくれる例と考えられる。

*改修本における「の」の並書表記(4例)

- かいのくに (甲斐州 九32ウ)
- おもいのほか (慮之外 十中9オ)
- わいのうら (鰐浦 十中19オ)
- とうめのあんない (遠目案内 十中15ウ)

一方、c 系と s 系の並書例には舌内入声音の例や語の性格により k 系や t 系と同じ並書例として取り扱うことができない。例えば、c 系には先行母音 o の並書「こち、そち」の例が多く、先行母音 o をはじめ他の先行母音にも舌内入声音「ち、つ」の並書例が多数現れている。また、s 系には主に「こそ」が並書表記されており、ただちに先行母音とのかかわりを考えるには無理がある。

以上のように、並書・単書表記が一定していないことから考えてみると、「捷解新語」の並書表記がある規範性に基づいて用いられたのではなく、あるがままの音を忠実に反映しようとした結果のようである。但し、並書・単書表記のゆれは先行

母音と並書との関わりにおいても見られるものの、u·kk, i·tt のような並書例が多く見られることから、先行母音と並書との関わりは否定できないと思われる。

6. 本章のまとめ

本章では『捷解新語』に用いられる並書表記のうち、原刊本における舌内入声音、促音の書記例を除いた並書表記と単書表記を中心に調査・考察を行ってきた。以上の調査・考察から、カ・タ行各音節、「こそ」「の」「有氣音」「濁音」などの並書表記が均質的でないことは明らかであるが、『捷解新語』における舌内入声音、促音の書記例を除いた並書表記の傾向だけを大まかにまとめてみると、以下のようなになる。

- ①語末・文節末に用いられる：並書全般に関わる
- ②先行母音との関わり：カ行(u·kk)、タ行(i·tt)、ナ行(の, i·nn)
- ③強調の意味から：サ行(こそ)
- ④朝鮮語(漢字音、硬音)の影響による：有氣音、濁音、ナ行(の)

上記①のように、語末・文節末においてほとんどの並書例が関わってくるのは、語末・文節末の無声破裂音と無声破擦音が強く聞こえることから、編者は硬音(濃音)として感じ取ったようである。そのような傾向を反映した結果、並書表記が用いられたものと考えられる。②③④の場合は、並書の用いられる理由が多岐にわたっており、その一つ一つの理由を明快にすることは難しい。但し、『捷解新語』における並書表記が音韻表記ではなく日本語の現実音を忠実に反映した音声表記であると考えることによって、表記においてゆれが見られるのも不思議ではないし、語末・文節末で用いられる多くの並書例が朝鮮語における硬音の弁別資質^{*18}と一致することも当然のように考えられる。即ち、『捷解新語』の外国人向けの日本語学習書であるという性格から、一つ一つの言葉を強めたり、ゆっくり丁寧に発音することが推測され、その結果、主に先行母音との関わりをもった無声破裂音が語末・文節末という環境において並書表記に硬音や長音のような資質を反映したのだと考え

られる。中東(1998)では、現代日本語の韓国語話者による発音観察の結果、語中の無声閉鎖音には一般的に硬音(濃音)が用いられるというが、このことは、朝鮮語を母語とする『捷解新語』の編者が語中・語尾の無声子音を並書表記したことと関わりがあるようと思われる。

以上、本章では原刊本を中心に並書表記の考察を行ってきたが、その他の刊本における並書表記の詳細な考察にまでは至らなかった。今後の課題として、朝鮮資料のほかにキリストン資料や日本の仮名資料などを総合的に検討・分析を行い、さらに並書表記に残された問題点が究明されなければならない。

注

- *1 並書表記とは子音を二つ重ねた表記のことで「重ね子音」とも呼ばれる。
- *2 但し、ハングル音注に用いられる合用並書st-の例は1例見られる。

おおせられませうと(sto)のきて御さる(改修本, 七21才)

この例は、音注において各自並書を用いるという原則への反例で、中期朝鮮語の固有語表記(合用並書)による誤植例と考えられる。

- *3 「舌内入声音、促音の書記例を除いた並書」とは、並書表記のうち舌内入声音や促音としては認められない例を指す。以下、本章で「並書(表記)」と記す場合は「舌内入声音、促音の書記例を除いた並書」を示す。なお、舌内入声音、促音を除いた理由については、両者がほとんど規則的に並書表記されており、つまつた感じで閉鎖が持続している音を反映した結果、並書が用いられたと考えられるからである。
- *4 「つかわしらる」は原刊本の6例のうち、1例だけが語頭の並書例で、その他の5例は単書表記されており、語頭の「つ」を並書として表記しなければならない理由は見つからない。また、改修本と重刊本においても同様の例は見られず、重刊本の「てんき」の語頭「て」の例だけが並書表記されている。

- *5 Cho(1970, p157-177)参照。
- *6 荒木(1975, p67)においても、「「四座講式の研究(金田一春彦著)」「補忘記(貞享版)」にあたってみたが、「捷解新語」と同じ語彙が思ふやうに捨ふことができなかつた」「並書がアクセント記号であるなら、特定の音節に限定されてゐるといふのもいかがなものか」とあり、並書はアクセントとは無関係なものと考えられている。
- *7 安田(1980, p69)では、「古今集の声点本や平家正節などで、ほとんど上平であらわれるのである」とされる。
- *8 森田(1973, p236)参照。朝鮮語の場合、語中の無声音 [k] [t] が [g] [d] のように有声音化する傾向があり有声音にならないよう注意をした結果、促音のような「釜山浦 hu-san-kkai」(「浦」は朝鮮語 kai)を用いたとされる。しかし、並書に対して単書例が半数程度占めており、語中の無声音が有声音にならないように並書表記を用いたと考えるには疑問が残る。また、濁音の並書例については説明に窮することになる。
- *9 これらの例は、『日葡辞書』において「Achi、Cochi、Sochi、Dochi」として現れており、『捷解新語』の並書とは対照的である。『日葡辞書』の見出し語に子音二重字表記の例が極めて少ないのは、「編者は、日本語を日本語としてローマン体で表記する場合には、子音二重字を用いない方針であった」(森田1993, p 159)とされるように、原則として非促音形を用いたようである。なお、三刊本に用いられる並書は、『日葡辞書』においては、すべて非子音二重字表記(非促音形)が用いられている。
- *10 荒木(1975)は、並書される「の」は、比較的、固有名詞、代名詞、場所・時間・慣用的表現などを表す場合が多いとするが、「そなた、こなた」等の代名詞の場合は、並書と単書との比率は3例：14例で単書のほうが多く用いられるなど、「の」に先行する音節により並書と単書が明確に使い分けられたかどうかについては疑問が残る。
- *11 原刊本や改修本には重刊本のような文節間の区切り点が用いられていないが、『捷解新語』が日本語学習書であることを考えてみると、原刊本や改修本に

- おいても任意に文節や句の単位で読んでいたことは予測可能なことである。
- *12 底수희(ト・スピ, 1995, p104-156)参照。各自並書が使われた期間とその後の記録の煩雑さを理由に、音韻単位ではなく硬音的音声、即ち、音声単位として前後音の連接関係からなる発音現象を忠実に記録するための Phonetic Sign と位置付けている。
- *13 安田章(1960, p299)参照。
- *14 撥音に後続する濁音の並書例の他に、撥音に後続する無声子音の例にも並書例が多々見られる(原刊本;「釜山浦 hu-san-kkai」8例、「天気 tyo (i)n-kki」7例等)。
- *15 「とうせん」(同前・同然, 重八14ウ)の例は濁音の並書表記として取り挙げてはいるものの、「と」並書のハングル音注の書き方からみて、濁音表記 nto を並書表記 tto とした印刷上の誤謬の可能性は否定しきれない。
- *16 辻星児(1975, p27)参照。朝鮮司訳院の「中国語教科書の正音表記」は、『捷解新語』に現れる濁音の並書表記と同様に、全濁音の音注に各自並書が用いられている。また、訓民正音の<解例>のうち文字を作る原理を説明した<制字解>には、全濁音を各自並書として表記するという記述がある。
- *17 吳(1988)は、中国の全濁音を朝鮮語の音韻に対置させると継続性の表記である各自並書がもっとも適切であったとし、各自並書が有聲音に近似していることを示している。また、現代韓国語において、バカ、バケツ、back、busなどの有聲音の例に硬音が用いられるという事実にも有聲音と硬音とが関係していると考えられる。
- *18 吳(1988, p130-134)参照。

参考文献

- 荒木雅実(1975)「『捷解新語』の並書法について」国語研究38
- 小倉進平(1928)「朝鮮語の toin-siot」『岡倉先生記念論文集』研究社
- 河野六郎(1994)「ハングルとその起源」『文字論』三省堂

- 趙 璜熙(2001)『朝鮮資料による日本語音声・音韻の研究』제이앤씨 ソウル
- 辻 星児(1975)「原刊「捷解新語」の朝鮮語について」国語国文44-2
- 辻 星児(1991)「重刊改修捷解新語に見られる区切り小点について」『朝鮮語史における『捷解新語』』(1997)所収
- 中東靖恵(1998)「韓国語話者の英語音声と日本語音声—聞き取り・発音調査の結からー」音声研究2-1
- 服部四郎(1944)「標準語とアクセント」『言語学の方法』(1960)所収
- 濱田 敦(1955)「語末の促音」国語国文24-1
- 福島邦道(1995)『続々キリシタン資料と国語研究』笠間書院
- 森田 武(1973)「捷解新語解題」『三本対照 捷解新語 釋文・索引・解題篇』
京都大学文学部国語国文学研究室編
- 森田 武(1993)『日葡辞書提要』清文堂出版株式会社
- 安田 章(1973)「重刊改修捷解新語解題」『三本対照 捷解新語 釋文・索引・解題
篇』京都大学文学部国語国文学研究室編
- 安田 章(1980)「朝鮮資料と国語表記」『朝鮮資料と中世国語』所収
- 安田 章(1987)「改修捷解新語」『外国資料と中世国語』(1990)所収
- 吳 貞蘭(1988)『硬音の國語史的研究』翰信文化社
- 도 수희(ト・スヒ)(1995)『韓国語音韻史研究』塔出版社
- Seung-bog Cho(1970)『A PHONOLOGICAL STUDY OF EARLY MODERN
JAPANESE — ON THE BASIS OF THE KOREAN
SOURCE-MATERIALS —』 Volume II
Analysis and Reconstruction of Early Modern Japanese
Phonology
ALMQVIST & WIKSELL. STOCKHOLM

辞書・出典類

- 『パリ本 日葡辞書』(1976) 勉誠社
- 土井忠生他編訳(1980)『邦訳日葡辞書』岩波書店

《資料》原刊本の並書・単書表記用例

| | 並書だけの場合 | 並書・単書の場合 | 単書だけの場合 |
|--------|---|--|---|
| 語頭 | 用例ナシ | つかわしらる | こと |
| 語中 | あつかまし / うかと, しかと おうかた(大方) おろかに, しつかに, たしかに, にわかに みちかい / かんほく はかり(pa-ka-ri) / わたくし あつらい, おとつい, きつよる | 助詞～かと, ～かな, ～から, ～とも こまかに / むしつけ きつかい, ふさんかい はつかし, むつかし かたじけな(う) さいそく / なにとそ | さて さためで はしめて しかしか なかなか とき たてまつり |
| 語末・文節末 | 係助詞～か / 係助詞～こそ 並列助詞～つ / 助詞～かと 助動詞～た(まるした) ふつか, ここのか, どうか, はつか うかと, しかと / ことく ふそく, まんそく / ふなけ みやこ / あち, こち, そち ことはのけち / つつ(ずつ) ひとつ, ふたつ するすると, ゆるゆると, ゆるりと なんと, わざと / やいと 濁音～か、～て | 接続助詞～て 引用・並列助詞～と 助詞～の 助動詞～た (まるしたを除外した例) てんき かたく いつ | ところ ひとり ……等 |